

中国・江南の玦飾に関する一考察

—河姆渡遺跡と塔山遺跡から—

藤 田 富士夫

はじめに

中国江南地域の河姆渡文化や馬家浜文化で玦飾⁽¹⁾が盛行する。1973年11月から74年1月にかけて行われた河姆渡遺跡の第1次発掘調査で新石器時代中期前半⁽²⁾に属する玦飾が出土した（浙江省文物ほか 1978年）。遺跡の文化層は上から第1層、第2層、第3層、第4層まであり、いずれからも玦飾が出土している。最下層の第4層は、放射性炭素年代で 6725 ± 140 年、 6960 ± 100 年（いずれも樹輪補正年代）と測定され、中国最古の玦飾として注目をあびた。

その後、中国東北部の考古学調査が進展し、1986年に遼寧省阜新市査海遺跡の発掘調査が行われ放射性炭素年代測定で 6925 ± 95 年、樹輪補正年代でBP7600年の玦飾出土が報じられたのを嚆矢として（方 1991年）、内蒙古の興隆窪遺跡（中国社会科学院 1997年）や興隆溝遺跡（劉 2002年）でも玦飾の出土が報告された。これらは中国新石器時代前期後半に属する興隆窪文化の所産であり、年代は8200～7600年前とされており（劉 2004年、50頁）、江南の河姆渡文化期（新石器時代中期前半）よりも古い。このため近年ではアジア最古の玦飾は中国東北地域に発生したとされるようになってきた。

2003年12月13日に敬和学園大学人文社会科学研究所では「環日本海の玉文化の始源と展開」（日本海学推進機構委託研究事業）をテーマとして富山県民会館で国際研究会議を開催した。そこでは、東アジアの玦飾に関する系統論に関心が集った。この会議を契機とした論文集が『環日本海の玉文化の始源と展開』として編まれ、そこに最新の東アジアの玦飾に関する論考が収載された。以下、本著の論考から研究動向を探る。

興隆窪文化の玦飾出現を積極的に評価する代表的研究者に香港中文大学の鄧聡教授がいる。鄧氏は東アジアの玦飾について、「今から約8000年余り前に興隆窪文化を代表する玦飾が現れ、その後東アジアの大陸及び島々のほとんどの地域へ浸透していった。玦飾の拡散は東アジアの大陸及び島々に様々な伝播方式を呈した」（鄧 2004年、19頁）として、東アジアの玦飾が興隆窪文化からの伝播、影響で出現したと説いた。鄧氏は、製作技術に着目し非轆轤玦飾体系と轆轤玦飾体系から東アジアの二大分布論を展開し、新視点による「糸鋸技法」を個別実証し広域的分布を認め意欲的に一元的伝播論を説いている。鄧氏の研究は、総合的、技術的に斬新な視点で論じられており今日の東アジア玦飾論の一つの

到達点を成している。

一方、興隆窪遺跡や興隆溝遺跡の調査を担当した中国社会科学院の劉国祥副研究員は、「ロシアの沿岸地域、日本列島、朝鮮半島で発見された先史時代の玉器の中で、環状玉塊、ヒ形器、彎条形器はよく一緒に出土するが、その直接の源は西遼河流域(筆者注・興隆窪文化)にある。長江下流域の河姆渡文化の中でも今から約7000年前の環状あるいは璧状の玉塊が発見されているが、ヒ形器はいまだないことから、それは独立した玉文化の起源地域で、決して西遼河流域の興隆窪文化の影響を受けた結果ではない可能性がある」(劉 2004年、52頁)とする。このように、劉氏は東アジアの広範な地域で興隆窪文化の玦飾の影響を認めつつも河姆渡文化については独自起源の可能性を説く。

また、浙江省文物考古研究所の孫国平副研究員は河姆渡・馬家浜文化の玦飾を詳細観察し、そこに普遍的に「糸鋸技法」が認められるとし、また穿孔に関してドリル・カット法の存在を指摘し、河姆渡文化における鍾乳石や蛭石、葉蠟石などの素材による特徴を検討し個別資料に基づいた研究を発表した。その上で、「今後、本当に(筆者補注・興隆窪文化からの)遠距離の玉工芸伝播が認められるとしても、河姆渡文化前期の玉塊にみられる工芸上の退化現象の説明にはならない。よって、河姆渡文化の人々が独創的に玉塊を作った可能性を排除することはできない」(孫 2004年、70頁)とした。

さて、日本列島の玦飾起源に関して伝播説と自生説の論争がある。早くに山内清男博士は、「最も古い円形のものと同様な形の玦状耳飾は、中国の南京市北陰陽營遺跡に出ている。仰韶および竜山文化の影響を受けた青蓮崗文化に属するといわれており、縄文前期の推定年代B.C. 2000年前後と比較的一致すると考えられる」(山内 1964年)として伝播説を主張した。この論は、当時広まりつつあったC14(放射性炭素年代測定)に対する批判として発表された。

筆者は、山内博士から薫陶を受けたことなどから1978年に「玦状耳飾の起源」(『富山史壇』69号 越中史壇会)を発表し、列島の玦飾の起源を中国江南に求めた。これ以降、江南起源を説いてきた。1987年12月に査海遺跡で江南地域よりも古い玦飾が発掘されたとの報道に接し、その後は中国東北部の査海遺跡や興隆窪文化へと研究視点を広げている。このことは先に書いたことがある(藤田 2004年)。今日、列島最古の玦飾に「環状玦」が存在することは明らかである(藤田 2003年)。また、南九州地域ではアカホヤ火山灰(約6500年前降下)直下からそれとは別型式の「小型円形タイプ」の玦飾が出土することが知られてきた(上田・廣田 2004年)。これらのことから、今の筆者は、前者は中国東北の興隆窪文化と、後者は江南の河姆渡・馬家浜文化との対比によって検討されるべきであろうと考えている。列島の玦飾の南北二系統起源説である(藤田 2004年、10頁)。なお、日本列島の玦飾の起源に関する研究史は、川崎保氏による「玦状耳飾系統・起源論概観」に要領を得て整理されているのでそれを参照いただきたい(川崎 2004年、35-43頁)。

このように東アジアの玦飾をめぐって、興隆窪文化に始源を求める点は研究者間で一致

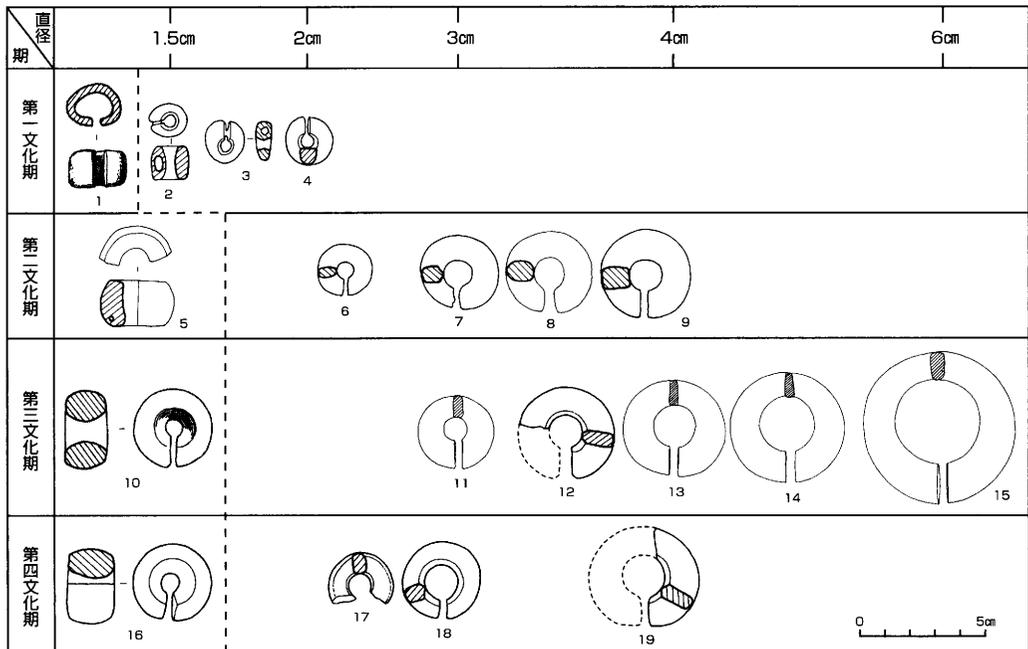
しているが、河姆渡文化を興隆窪文化の伝播拡散論で理解する鄧氏と、河姆渡文化の独立・独創を指摘する劉・孫氏との見解に分かれる。いわば玦飾の一元論と多元論である。

かかる中で第1次の発掘調査から30年を経て、待望の報告書『河姆渡—新石器時代遺址考古発掘報告』上冊・下冊（浙江省文物考古研究所 2003年）が発刊された。報告書を踏まえて孫国平氏は河姆渡・馬家浜文化の玦飾を一括詳述した（孫 2004年）。中には未発表資料なども含まれている。

ここでは、これらの報告を基に河姆渡・馬家浜文化における玦飾を整理し、その在り方を概観したい。玦飾の分布論や技術論、伝播論などの研究には各個体に時間位置を与える編年研究が欠かせないものと思うが、管見ではこれまでの河姆渡・馬家浜文化の研究では行われていない⁽³⁾。彼我的研究方法や関心の違いによるのだろうが筆者には意外である。ここでは編年的研究についての試論を呈し、あわせて塔山遺跡の玦飾の分析を行い馬家浜文化期における社会構造の一端を探ってみたい。

I. 河姆渡遺跡の玉器編年

河姆渡遺跡の第1次発掘調査（1973年11月～74年1月）と第2次発掘調査（1977年10月～78年1月）で計32個の玦飾が出土した。それらは最下層の第4層（第一文化期）から6個、第3層（第二文化期）から12個、第2層（第三文化層）から3個、第1層（第四文化層）から11個の玦飾が出土した。



第1図 河姆渡遺跡・塔山遺跡出土玦飾による編年図(11・13～15は塔山遺跡、それ以外は河姆渡遺跡) 1は骨製玦飾 (浙江省文物2003年を基に作成)

報告書に従って、それらを時期別に分けて第1図に掲載した。編年図では報告書に図示されていた個体はすべて登載したが図化公表されていない個体もあって不完全さを残す。次に、各文化期の特色について記しておきたい。

第一文化期 第4層から出土した玦飾6個の直径は1.7~3.3cmの間に収まっており、他の文化期の玦飾と比較すると小型品で構成される。この大きさは指標の一つとなる。

本期の切目作出に際しては糸鋸技法が普遍的に用いられる。図の2・3は切目の中ほどに切り残しがある。概報(浙江省文物管理ほか 1978年)では「未完全分離」と報告されていたので、筆者は玦飾の未成品として検討したことがある(藤田 1984年)。しかし浙江省考古文物研究所の牟永抗顧問によって、良渚文化や紅山文化の玉器製作に「糸鋸」が使用されていることが報告(牟 2003年、30頁)されると、コロンブスの卵のように河姆渡遺跡の玦飾切目作出でも確認された。このことは2003年12月13日に富山県民会館で開催された「国際研究会議 環日本海の玉文化の始源と展開」(敬和学園大学人文社会科学研究会主催)で牟永抗氏と鄧聡氏によって報告され、さらに鄧聡氏(鄧 2004年、27頁)と孫国平氏(孫 2004年、66頁)は論文集でも発表した。このように中国研究者によって河姆渡遺跡の「未完全分離」玦飾は研磨状態からみて完成品とされた。当該品は、これまでの玦飾の概念(耳朶に穿った孔への装着)から外れるものであり、本体そのものの耳朶への一次的装着は不可能である。耳朶への装着を行うには別の付属的着装具が必要となる。これらの切目や心棒部分に光沢が認められ(孫 2004年、カラー口絵3)紐ずれ痕と認めることができる。これらは紐を通した垂下型の装身具であろうと思われる。

特に3〔T234(4B):301(孫 2004年、カラー口絵3)〕の頭頂部内孔縁部には明瞭に紐ずれ痕が観察できる。中心孔が頭頂部に偏っている。中心孔位置の偏在性は第二文化期にはみられず本期の特徴的形態を成す。従来、これは河姆渡遺跡での代表的「玦飾」とみられてきたが、むしろ「玦飾形垂玉」であり「河姆渡型装身具」とでも言うべき特異な装身具とすることができる。なお、玦飾形垂玉は第二文化期の5でも切目部に心棒痕が確認できるので少なくとも当該期まで存続したとあって良いだろう。ここで改めて第一期の玦飾を見ると、4がオーソドックスな初出形態として注目される。それは直径2cm、断面0.6cmを測りやや肉厚を成す。

ところで、1は骨製玦飾で1個出土している。肢骨を粗く磨いて楕円形に整形し、一端に切目を入れている。直径1.6~2.1cm、高さ1.4cmを測る。中国での骨製の玦飾は寡聞にして他例を知らないが、本例によって、今後の出土が期待されるところとなる。日本ではいくつかの骨角製の玦飾が出土している。河姆渡遺跡との対比で言えば、年代的に近い大分県山香町の川原田岩陰遺跡をあげることができる(賀川 1998年)。第5層(縄文早期後半、田村式併行)で三体の埋葬人骨が発掘されていて2個のイノシシ脚骨製の玦飾が出土している。1個は完形で指貫型(=柱状玦)を呈する。もう1個は半欠品で外縁は七角形状に角

張っている。これら2個は対を成すものと見られる。ちなみに川原田岩陰遺跡第5層の田村式土器は、早期押型文土器の3期に相当し、同型式を出土した大分県の粉洞穴の放射性炭素年代測定はBP7730±50年と出ている。測定年代の準用から川原田岩陰遺跡第5層が河姆渡遺跡第一文化期より古くなる可能性もあるが、ここでは参考年代と理解しておきたい。いずれにしろ、日本海をはさんだ両地域の玦飾出現期において骨製玦飾が存在する現象が見られる。両地域の 玦飾素材に共通するバリエーションがあることを示唆するようだ。ちなみに、列島では石製、土製、骨角製の玦飾が認められている。

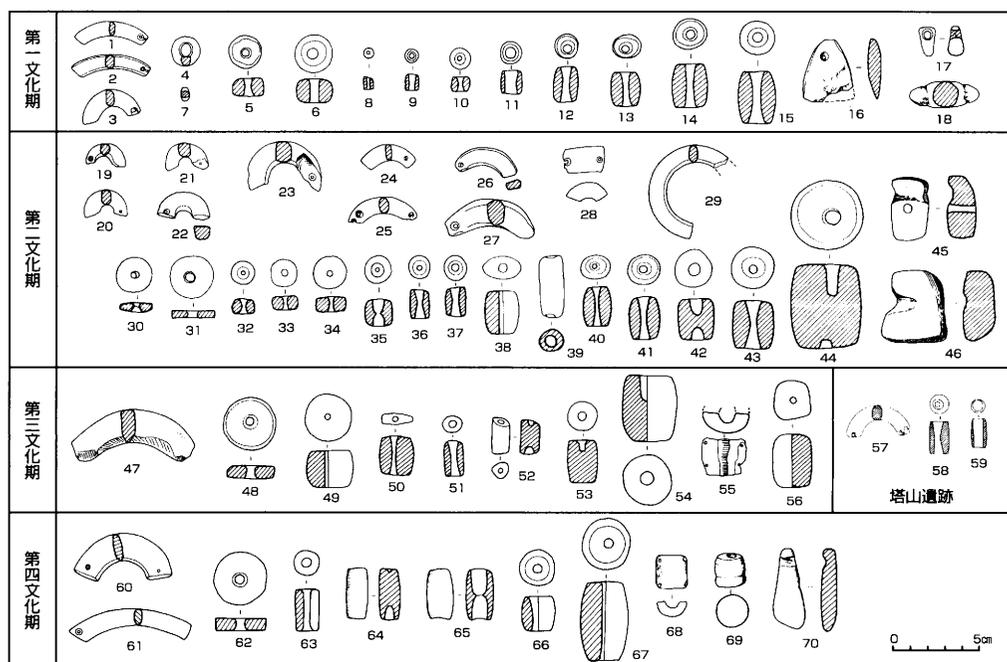
河姆渡遺跡では石製と骨角製といった素材の違いがあったとしても、考古学的には「形式」「型式」を優先すべきである。この素材問題については以前に書いたことがある(藤田1975年)。つまり河姆渡遺跡、川原田遺跡の骨製玦飾は、素材の違いよりは「柱状玦飾」として形式的共通性に意義を有している。柱状玦飾は、興隆窪文化第二期に存在しており(中国社会科学院 1997年)東アジアの玦飾始源期に成立した形式である。2の玦飾形垂玉は器身が高く、柱状玦飾を意識して製作されていると思われる。石製の2・3は形態的には1の骨製の楕円形と共通している。骨製の形状がモデルとなっている可能性があるかもしれない。柱状玦飾は、円形に整えた5(第二文化期)、10(第三文化期)、16(第四文化期)があり、全期を通して存続した形式であったとすることができる。興隆窪文化期以来の祖形の伝統を引くとして良いだろう。

第二文化期 12個の玦飾が出土した。6や7は第一文化期の玦飾の大きさの範疇に含まれる。このような中であって、8、9といった直径4cmになる大きな型式が現われる。円形で肉厚の断面を有する。この点で、第一文化期の4の系統から発展的に現れた型式であろうと思われる。本期では、後述するように玉製飾具において璜が盛行するなど発展的様相がみられる。

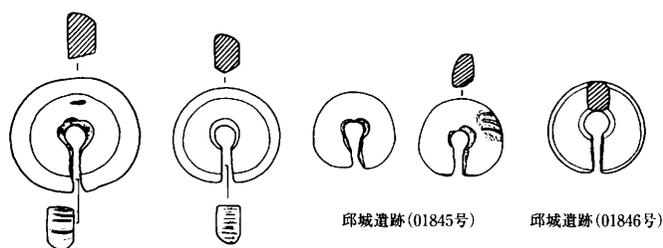
第三文化期 3個の玦飾が出土した。河姆渡遺跡での出土点数が少ないため、ここでは塔山遺跡出土品を補填して用いた。11、13、14、15は塔山遺跡の出土品である。塔山遺跡については次項で詳述するが、江南地域で盛行する馬家浜文化に属する。孫国平氏の報告(孫 2004年)では馬家浜遺跡や邱城遺跡から、硬いドリルによる両面穿孔で中心孔が設けられた直径2～3cm前後の比較的小さな玦飾が出土している(第3図)。本期の玦飾は、河姆渡遺跡では僅少だが江南地域全体ではむしろ盛行する。孫氏はそれを具体的資料でもって明らかとした。第二期と比べて、大型で肉薄の玦飾が盛行する傾向がある。

第四文化期 11個の玦飾が出土した。16の柱状玦飾は第三文化期の10を踏襲する。中心孔の直径は小さく第一文化期の2資料からの系譜を引いているように見える。断片的な報告資料から全体像を推し測ることはできないが、全体的に第三文化期からの形式連動上にあると見ることができよう。

第一期～第四期の玉製飾具 第2図に玦飾以外の河姆渡遺跡出土の玉製飾具を時期別



第2図 河姆渡遺跡(一部塔山遺跡)の石製装身具一覧(浙江省文物2003年を基に作成)



馬家浜遺跡(01304号) 馬家浜遺跡(01308号)

第3図 馬家浜文化期の小孔型玦飾-縮尺不同-(孫2004年より)

(層位別)に作図した。第一文化期の玦飾には、璜(1~3)、丸玉(4~6)、管玉(8~15)、垂飾(16~17)、網錘飾(18)がある。丸玉には小型(4)と大型(5・6)があり、管玉の長さには小型(8~10)、やや中型(11)中型(12・13)、大型(14・15)の4種がある。ほかに瑪瑙製の小玉(7)がある。これらと玦飾がセットとなって河姆渡遺跡第一文化期の装身具を構成している。以後の第二文化期から第四文化期を通して璜、丸玉、管玉は装身具の基本的構成要素を成している。第二文化期では玦飾と璜のセットが卓越する。また第二文化期では超大型管玉(44)が出現し、以降、第二文化期(54)、第三文化期(67)へと継続する。また第二文化期では、楕円形管玉(38)が現れ、第三文化期(50)にも存在する。このように第二文化期の装身具は発展的内容を示している。これらバリエーショ

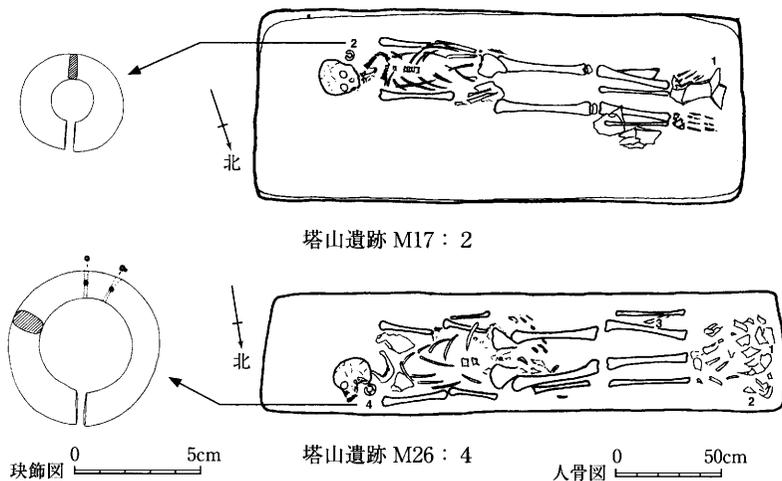
ンに富む装身具類の基本構成は第一文化期に完備していることは注目される。

(*ここに第2図の第二～第四文化期の玉種を記しておきたい。なお、玉種名称は必ずしも報告書に拠っていない。第二期=璜19～28、環玉29、平玉30～31、丸玉32～34、管玉35～44、垂飾45～46)。第三期=璜47・57、平玉48、丸玉49、管玉50～56・58・59。第四期=璜60～61、平玉62、管玉63～68、垂飾69・70。)

II. 塔山遺跡の玦飾から

河姆渡遺跡の玦飾は包含層から出土し良好な編年資料となる。一方、浙江省の塔山遺跡では人骨の耳部から玦飾が出土し(第4図)、江南地域の当該遺物が耳飾り機能を有していたことを示す。東アジア最古とされる興隆窪文化では興隆窪遺跡や興隆溝遺跡、査海遺跡などで人骨の両耳部あるいは土壌から二個一対が並置出土しており耳飾りとして認められている(「藤田 2004年」に中国の二個一対例を集成した)。塔山遺跡の事例は、江南地域においても当該遺物が興隆窪文化と同様に耳飾りであることを示している。

玦飾出土土壌墓の概要 塔山遺跡は浙江省象山县丹城镇に所在する。1990年と93年に発掘調査が行われ55基の土壌墓が発掘されている(浙江省文物ほか 1997年)。これらは下層墓群(40基)と中層墓群(15基)に分かれる。玦飾は計6個あって下層墓だけに出土している。ここでは下層墓についてのみ詳述する。下層墓は甲群(=遺跡の西と南部に分布し副葬品は単純で、三種類の陶豆と玉玦を伴う。墓は南東方向を向く)、乙群(=遺跡の東と北部に分布し釜および釜、盤、鉢の組み合わせをもつ。墓は東あるいはやや北を向く)、丙群(=墓の規模や向きの一一定しないもの。甲群の陶豆や乙群の釜を有しない)の三グループに区分されている(第5-1図)。



第4図 塔山遺跡の玦飾装着人骨(浙江省文物ほか1997年を基に作成)

本遺跡の玦飾は、甲群ではM10、M11、M17、M34、M37の5基から、乙群ではM26の1基から検出されている(第5-2図)。それぞれ1個ずつ検出されていて計6個となる。これらの玦飾は、報告書では「A型」と「B型」に2大別されている。A型は横断面が平らで肉薄、B型は横断面が肉厚である。これによってA型にはM10、M17、M37の3個があるとされている。B型にはM11、M26、M34の3個があるとされている。横断面の厚さは、分類の一面を示すものの、それが意味するところまでは触れられていない。

次に私考による分析を行いたい。本遺跡では、遺構(土壙墓)に伴って玦飾が出土しており、あわせて基本データが報告されている。これらの情報を基に、まず6個の玦飾の関係について同時存在か、それとも時間差があるかを検討したい。前述したように甲群墓では5個出ており、乙群墓では1個出ている。両群に切りあい関係があつて、「乙群墓が甲群墓を切っている」(報告書65頁)ことから、甲群墓が乙群墓よりも古く築かれたことが認められる。これによって甲群墓に見られる5個は、乙群墓の1個(M26)よりも古いことが判明する。従つてM26玦飾は、本遺跡中でもっとも新しい玦飾とすることができる。

なお、塔山遺跡の甲群墓の陶豆は、河姆渡遺跡第2層(河姆渡遺跡第三文化期)出土の陶豆に類似するとされている。それらの陶豆は馬家浜文化類型の典型ともされている。また甲群墓の陶豆と乙群墓の陶釜は、河姆渡遺跡第2層や名山后前期地層で共存関係が認められている。このことから、甲群墓と乙群墓はともに河姆渡遺跡第三文化期(馬家浜文化)の所産とすることができる。先に、塔山遺跡の玦飾を第1図の河姆渡第三文化期に補填して論じたのはこのことによる。

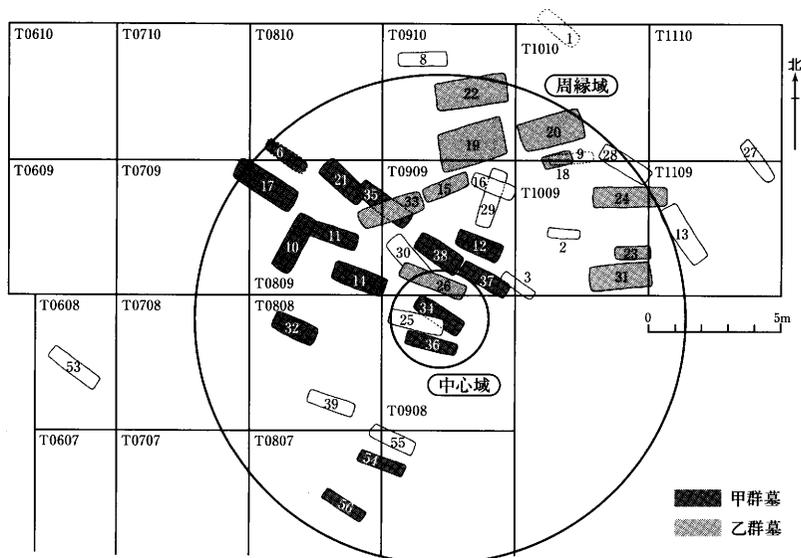
新旧築成の土壙墓 画一的方法であるが、まず土壙墓の方向を検討しておきたい。M34、M17、M37はN-59°-Wで同一主軸をとる(このグループを「I群」とする)。また、M11とM26土壙墓はN-70°-Wで同一主軸をとる(同「II群」とする)。同一主軸を有する土壙墓は方位思想において築成の原理を共通にしており系譜を同じくすると想定できる。これらの群別はそれぞれ被葬者間の血縁や地縁関係を反映していると考えられる。ここにおいて玦飾群は新旧の二群が存することとなる。II群には先述した乙群墓であるM26土壙墓が含まれているので、I群はII群よりも古く築かれたとすることができる。

まずは、M11とM26土壙墓で構成されるII群を検討する。M26土壙墓が乙群墓に比定されているので最新段階である。次に、M11がM10土壙墓によって切られているので、M10→M11と推移したことが確認できる。このことは、塔山遺跡報告書26頁に示された「下層墓群分布図」や報告書27頁にも記されている。この関係から、(古)M11→M10→M26(新)への推移が導きだされる。玦飾が被葬者に伴出したものとするれば、各玦飾の変遷もこれに準じることとなる。

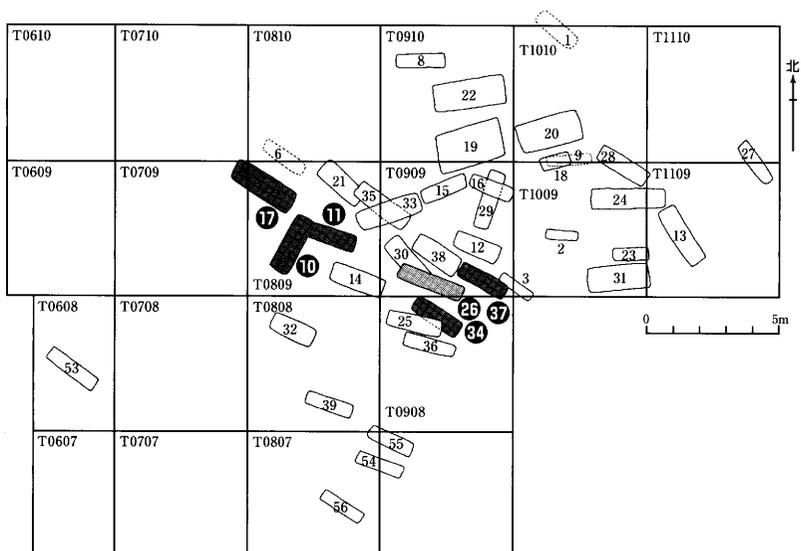
ところでM10土壙墓(主軸方向N-28°-E)は他の土壙墓とは方位が異質である。副葬品の性格では甲群墓に分類できるが、主軸方位では甲群墓のM11に直交して築かれてい

る。むしろ乙群墓に近い方位をとっている。副葬品においては甲群、方位では乙群と、両群の性格を有している。本土墳墓には、甲群墓から乙群墓へと推移する変革の萌芽を認めることができよう。こういった意味でM10土墳墓は乙群に属するM26の先駆けを成しているようにみえる。なお、M26土墳墓が甲群墓に類似する方位をとるのは、乙群墓の中にあって、その系譜を甲群墓に求める必要があったためと考える⁽⁴⁾。この論旨は後述したい。

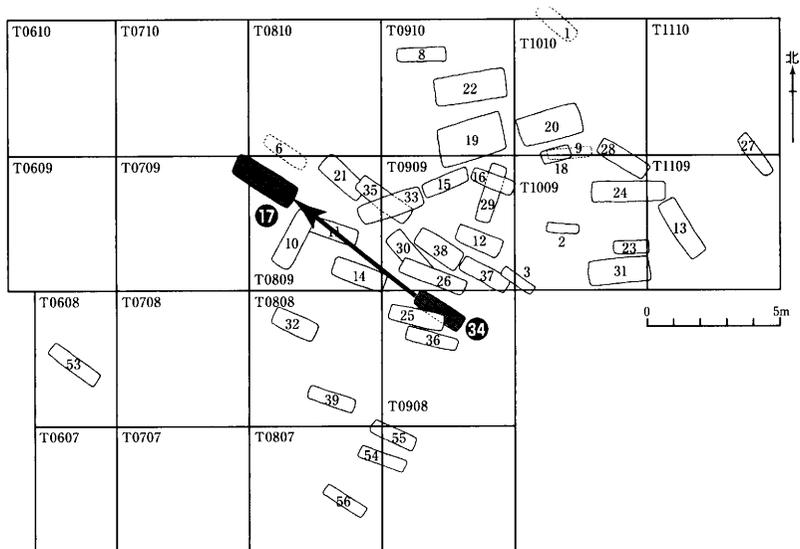
I 群の中の築成順序 ここでM34、M17、M37から成る I 群を検討しよう。I 群では、



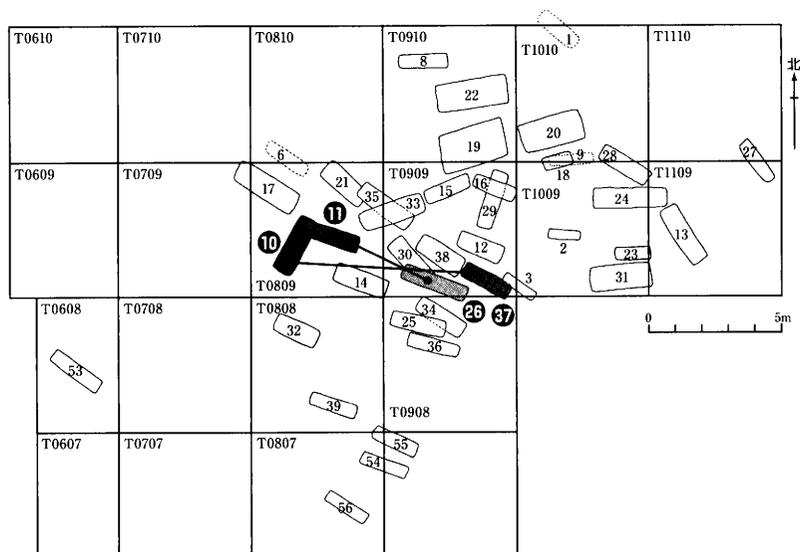
第5-1図 塔山遺跡の下層墓分布図(甲・乙群墓の分布)
(浙江省文物ほか1997年に加筆、以下 一2~4図も同)



第5-2図 塔山遺跡の玦飾出土土墳分布図



第5-3図 塔山遺跡の玦飾出現期(M34→M17)



第5-4図 塔山遺跡の玦飾展開・衰退期(相關図)

土壌墓の在り方からの手がかりに欠ける。そこで、玦飾から推考してみたい。

玦飾は両耳に同一形式を着装するのを原則とする。このことは、東アジアの玦飾を有する多くの土壌墓で両耳の位置から同一形式の玦飾が検出されることから異論がない。中国東北部の興隆窪遺跡（M117土壌墓）や興隆溝遺跡（M7土壌墓）などにその典型をみる。このような観点で本遺跡出土例をみると、M10とM37、M11とM26玦飾とが相似し

ていることに気づく。M10は直径4.6cm、M37は直径4.5cmで0.2cmの差があるにすぎない。同じようにM11は直径6.2cm、M26は直径6.0cmでこれも0.2cmの差にすぎない。つまりM10とM37およびM11とM26は本来一対の玦飾であったと推測できるのである。それが何らかの理由で分散して埋納されたと考えたい。

つまり土壙墓の新段階＝Ⅱ群に属するM10と、古段階＝Ⅰ群のM37は本来同一セット関係を有していた可能性が高い。これが正しいとすればM37はⅠ群においてもっとも新式に属することとなる。

次にM17土壙墓の玦飾は、報告書が「A型」として分類するようにM37とM10玦飾の型式に含まれる。M17玦飾は直径が4.0cmで中心孔が大きい。M34玦飾は中心孔が小さく直径も3cmと他の5個よりも小さくて異質である。M17玦飾は型式において、M37やM10玦飾に近似する。

さて、M34玦飾は他の5個よりも小型である。小型小孔タイプは、江南最古の河姆渡遺跡第4層（河姆渡第一文化期）出土の玦飾の特徴でもある（第1図）。このことから小型小孔の玦飾は古相の系統を引くものとみなすことができる。本遺跡中で異質な形態を呈するM34玦飾は本遺跡では最古に比定できるところとなる。

以上を整理すると、Ⅰ群では、(古) M34→M17→M37 (新)の順に土壙墓が築成されたとすることができる(第5-3図)。この順番は玦飾変遷の推移でもある。ここにおいて塔山遺跡の玦飾を有する土壙群は(古) M34→M17→M37→M11→M10→M26 (新)と継起的に築かれたものと想定できる。

本遺跡で玦飾を遺存する土壙墓は、遺跡中央部の特定の空間域に配され、あたかも北西―南東方向ラインに限定できる（第5-2図）。この空間域に玦飾を有する被葬者が継的に埋葬されたことを示す。少なくとも甲群墓の副葬品には陶豆以外のものは稀である。そのような中であって玦飾を有する被葬者は特別に選ばれた人々であったと思われる。換言すれば、特定の人だけが玦飾を装着することが許されたといえよう。

先に、中国東北部の興隆窪遺跡（M117土壙墓）や興隆溝遺跡（M7土壙墓）の玦飾は二点一対で検出されるとした。その限りでは本遺跡の事例は特異である。先に大きさや特徴から類推したように、本遺跡では、単独で出土するM37とM10およびM11とM26土壙墓の玦飾は本来一対で入手され何らかの理由で分かれて埋納されたものであろう。M37土壙墓とM10土壙墓の被葬者は互いに一対の玦飾を分け合う関係にあったとすることができる。このことはM11土壙墓とM26土壙墓の被葬者間にも認められる(第5-4図)。この共有玦飾関係と土壙墓築成過程を重ねると複雑となる。第6図に示したように、同一型式の玦飾を共有するM37とM10の間にM11がはまり込む。またM11とM26との間にM10がはまり込む。このことは「伝世」で理解できそうである。二個一対でもたらされた玦飾が直系氏族構成員間で伝世されたとするものである。二系統の被葬者が世代を違え

て玦飾を共有しているかのようである。「二系統」を成すのは双分制を反映しているのかもしれない。また「世代を違えて」としたのは、M11がM10によって切られていることによる。つまりM11→M10は継起的な移行を成す。そのような関係にあって、少なくともM11が築かれて後、墓地の場所の記憶がある程度薄れる時間経過を経てM10が営まれたらしい。あるいは、異なる氏族の進出も想定できるかもしれない。いずれかであろう。

本遺跡の土壙墓では人骨が残っていて性別などがいくらか分かっている。それと土壙の推移を見ると次のようになる。M34（成年男子・仰身直肢葬）→M17（成年女子・仰身直肢一次葬）→M37（成年性別不明・仰身直肢葬）→M11（成年男子・仰身直肢二次葬）→M10（成年性別不明・仰身直肢葬）→M26（成年男子・仰身直肢一次葬）となる。共有玦飾関係にあるM37（成年性別不明・仰身直肢葬）とM10（成年性別不明・仰身直肢葬）では成年が装着するも残念ながら性別は不明であった。M11（成年男子・仰身直肢二次葬）とM26（成年男子・仰身直肢一次葬）ではいずれも成年男子と判明している。このような関係は血縁関係のある男子間での共有関係を示すであろう。男子間では、兄弟や親子が想定できるし、義兄弟も候補となる。

本遺跡では、玦飾はいずれも成年層が所有しており甲群の成立期（M34）および乙群の成立期（M26）では、リーダー的役割をもって選ばれた人物が男子であった可能性がある。一方で、M17が成年女性であるのはM34と夫婦関係を成すか、あるいは坐女的な単独埋納である可能性もある。

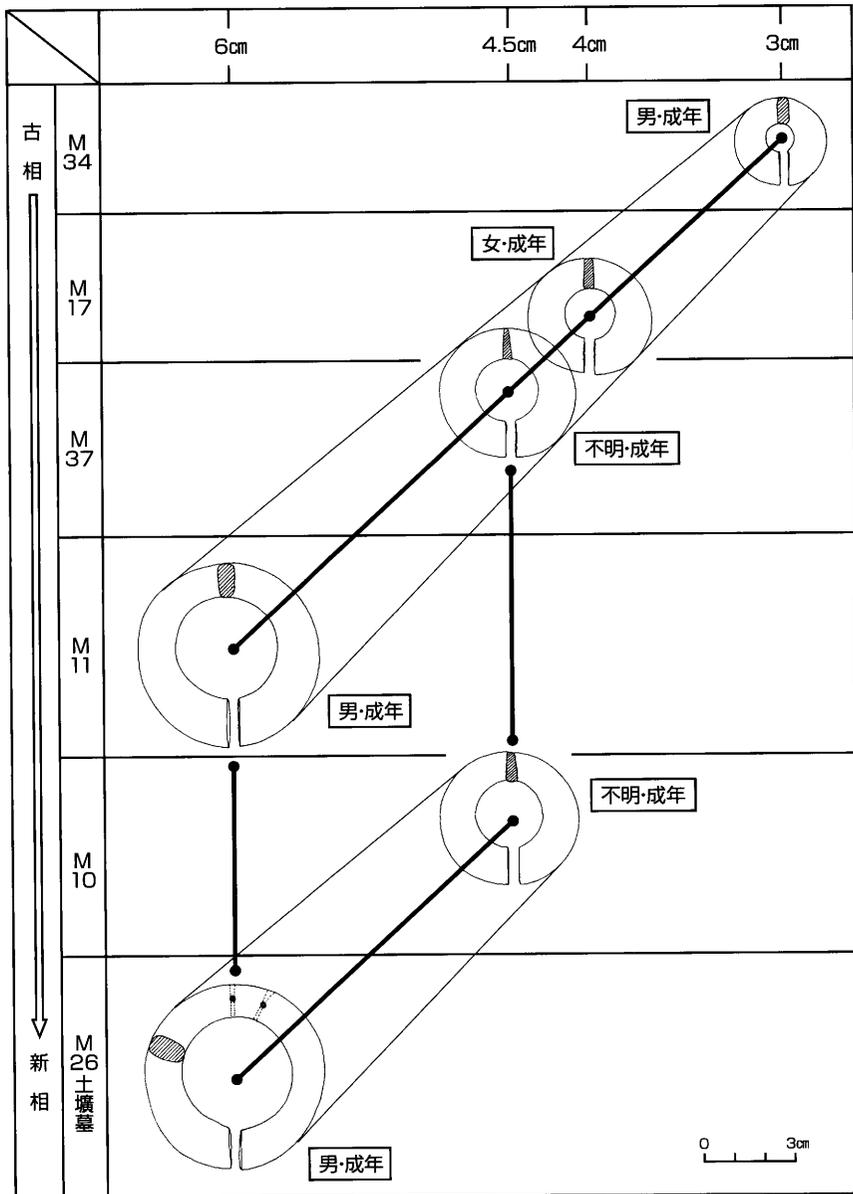
けだし甲群土壙墓はM34を初源とし、直後にM17が築かれた(第5-3図)。興味深いのは甲群土壙墓の南東端にM34が位置し、北西端にM17が位置していることである。つまり甲群土壙墓はこの2基が墓域を画するかのようにならびに沿って成立しているのである。

また、乙群土壙墓で唯一玦飾を有するM26が甲群土壙墓のM11と共有玦飾関係にあるのは、乙群が甲群集団を母体としていることを示唆する。M26土壙墓は、当時おそらく墓の所在が伝承地となっていた甲群集団の始祖を成すM34土壙墓に並置されて営墓されている。このことはM26被葬者が甲群の始祖墓と同一地に埋葬されることで、その氏族の正当性を主張しているかのようにも見える。甲・乙墓群の中心域と思われる領域にM34とM26が営まれるのは偶然とは思えない。

下層土壙墓群は、M34とM26土壙墓を中心とし、M17を外縁とする円領域に集約的に成立しているかのようである(第5-1図)。

玦飾のベクトル式コード体系 以上のように土壙墓群の築成順序と共伴する玦飾の新旧関係を考察した。それを踏まえて玦飾の型式編年について述べたい。本遺跡出土の玦飾について、すべてが環状を呈しており時間の経過とともに考古学的な「型式変化」を成したとの前提で進めたい。これまで、中国の玦飾の型式編年が不分明で、モンテリウスの普遍的「型式」が応用できないのでないかとも思った。しかし、ここで見たように「伝世」な

どによって新旧の型式が混在する可能性がある。M37とM10が同一型式で、その間にM11瑛飾が使用されているのは、両型式の同時存在を示し、型式の在り方をより複雑なものとしている。しかも、日本の瑛飾のように明確な画期による形態変化を具現しないことも型式解明を難しくしている。そこで、ここではそれらの関係の見通しを得るため新しく瑛飾の「ベクトル式コード体系」(ポール 1997年)の応用を試みておきたい(第6図)。



第6図 塔山遺跡瑛飾のベクトル式コード体系応用図

その方法では所属時期の確実な瑛飾のうち最古と最新の形（型式）が明らかになっている必要がある。それが明確であれば、この間にはまる型式はベクトル式コード体系によって割り出すことができると考えられる。この技法は「変異化（morphing）」と呼ばれ、変異化される二つの対象をベクトルでコード化することで識別が可能となる。大量かつ複雑な様相を呈する瑛飾のコード化には膨大な時間と高度な技術が必要であるが、塔山遺跡では幸いにも形式が単純（円形）で点数も少ないので有効であろうと思われる。ポールは「グラフィック・アーティストにとって、ベクトルによるコード化の技法は新しいものであり、わくわくする可能性に満ちている。しかし、生物の脳にとっては、この技法は古いものである。じっさい恐竜よりもはるかに古い」と述べている。型式的変異化は生物の脳が本来的に所有しているとも言っている。最新の認知科学の方法である「ベクトル式コード体系」は極めて進化論的、機械的、型式学的である。今後の考古学の方法として十分応用が期待できるであろう。

ベクトル式コード体系の応用の試みに際して、ここでは変異化される二つの対象すなわち最古の瑛飾M34と最新の瑛飾M26を両端に置き（図では、時間軸の早い個体を上列に配したため上列端にはM26と共有関係にあるM11を置いた）、その間のどの位置に他の瑛飾が配置できるかを示した。変異化の距離においてM34とM17の間およびM37とM11との間に距離感が認められる。すなわちこの間に瑛飾の型式的空白つまり「時間の空域」が認められることとなる。

なお第6図では縦軸に時間推移を横軸に形式を設定し、伝世品のM10とM26は時間の推移によって下段に配した。本図では、瑛飾は小型品から大型品へと推移している。M17で切目腕部の幅広化が始まり、M11で切目腕部幅が頭頂部幅を超える型式となる。これらの型式推移は、先に見た土壙墓間の推移と矛盾なく一致する。本図からは、塔山遺跡の6個の瑛飾が、4型式（4時期）から成り、伝世も含めて6代にわたって用いられたことがうかがえる。

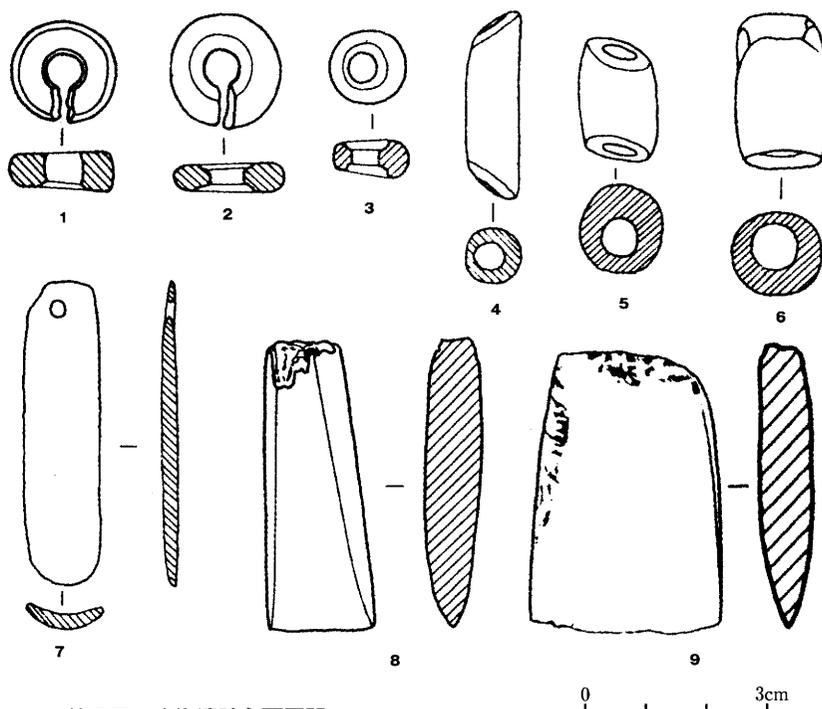
浙江省文物考古研究所副研究員の孫国平氏は、河姆渡・馬家浜文化における瑛飾の観察を通して次のように展望している。「玉瑛の形態は初期から晩期まで、多方面の変化を見せている。1. 全体の形が小さいものから大きなものへ。2. 外縁の輪郭が不揃いなものから徐々に整った円に。3. 瑛全体の厚さが不均衡なものから均衡のあるものへ。4. 中央孔が小さいものから大きなものへ、位置も偏った位置から徐々に中央へ。5. つや出しの技術も日増しに細かいものへ。6. 全体の形も均整がとれ、美しい外観に。これら一切が玉工芸の技術を全方位的に進化したことを表し、人々の審美能力も日増しに高まった結果となった」（孫 2004年）。本稿で検討した塔山遺跡の瑛飾のあり方は、孫氏の指摘の大勢を支持するところとなった。

III. 江南地域への興隆窪文化の影響

今日、本稿冒頭にも記したように河姆渡文化への興隆窪文化からの玦飾伝播について関心があつまっている。ここではそれを検討しておきたい。

興隆窪文化は新石器時代前期後半に属し、河姆渡文化は新石器時代中期前半に属する。このため河姆渡遺跡への玦飾伝播問題を議論するには、まずもって河姆渡遺跡(=現状で江南地域最古の新石器時代遺跡)の古段階を成す第一文化期の玦飾と共伴する玉製飾具の様相を明らかにする必要がある。第1図と第2図にその概要を整理したが、それは璜と丸玉、管玉、垂飾と共伴する。このことは鄧聡氏が東アジアにおいて「管珠、環状飾物、垂飾の三者は旧石器時代から新石器時代に至る共通の装飾物である」(鄧 2000年)とする基本認識を示したが、それを継承するものとなる。

次に河姆渡遺跡第一文化期に先行する興隆窪文化期の査海遺跡出土の玉器をみておきたい。第7図は1992～1994年の発掘調査で出土した主要玉器である(辛・方 2000年)。1・2は室内葬M11墓から出土した一対の玦飾である。1は直径1.7cm、内径0.6cm、厚さ0.6～0.7cmを呈し、2は直径1.7cm、内径0.6cm、厚さ0.5cmを呈する。孔はほぼ中央に穿たれており、横断面は肉厚気味である。大きさや形態は河姆渡遺跡第一文化期の第1



第7図 査海遺跡主要玉器

1.2玉玦、3玉環、4～6玉管、7玉匕、8玉鑿、9玉斧 (辛・方2003年を基に作成)

図4と類似する。それ(4)は直径2cm、厚さ0.6cmを成す。査海遺跡では、平玉(第7図3「玉環」、管玉(4~6「玉管」、石ヒ(7)、玉鑿(8)や玉斧(9)が相伴している。このような装身具類の組み合わせが査海遺跡で認められる。

一方、河姆渡遺跡第一文化期の石製装身具には、玦飾、平玉、管玉、玉斧形の垂飾といったように査海遺跡で見られる装身具の大半がそろっていて、しかも、玦飾や平玉は形態的にも類似している。このようなことから河姆渡遺跡第一文化期は興隆窪文化(とりわけ査海遺跡文化)の影響を受けて出現した可能性が高い。ここで問題となるのは、劉国祥氏が指摘するヒ形器が河姆渡文化にみられないことである。これは、河姆渡文化ではヒ形器が璜に置き換わったことによるのかもしれない。このことは思い付きの域を出るものではないが、論証には用途や文化など多様な検討を要するので、ここでは備忘として記するにとどめたい。

興隆窪文化と河姆渡文化との関連性について、鄧聡氏は「糸鋸技法」が共通して存在することに注意している。河姆渡遺跡の糸鋸については、牟永坑氏や孫国平氏も紹介している。興隆窪文化の中に存在する事例について、2004年7月に中国・赤峰学院で開催された「紅山文化国際学術検討会」の巡検で、筆者は小南山遺跡出土玦飾の切目に糸鋸技法が用いられているのを牟永坑氏、鄧聡氏、劉国祥氏とともに確認した。特殊とも言える切目作出技法が河姆渡遺跡の第一文化期の玦飾および玦飾型垂玉に用いられている。このことは鄧聡氏が論述するように河姆渡遺跡の玦飾文化が興隆窪文化の影響を受けて出現した可能性の高いことを支持するところとなる。

おわりに

東アジア世界の新石器時代には玦飾が普遍的に流布する。現在、新石器時代前期後半にさかのぼる玦飾は中国東北部の興隆窪文化でのみ知られている。ついで中期前半には江南の河姆渡文化・馬家浜文化に盛行する。後期の江南・良渚文化では華麗な中国玉器文化が展開する。江南の河姆渡文化・馬家浜文化に出現した玉製装身具は、後続する良渚の玉文化のルーツとして、そして華南や珠海地域あるいは東南アジア地域の玦飾文化とどのように関っているのかについて常に留意されてきた。日本列島における玦飾においても例外ではない。

このように河姆渡文化・馬家浜文化における玦飾と玉製装身具は東アジアにおける装身具文化のキャスティング・ポートを握っているといっても過言でない。これまでも河姆渡文化と馬家浜文化の装身具は注目されてはきたが、資料公開が十分でないこともあって隔靴搔痒の感は否めなかった。このような中で、近年における河姆渡遺跡の報告書の刊行や『環日本海の玉文化の始源と展開』などでの中国研究者の意欲的発表によってその概要がかなりつかめるようになってきた。

本稿は、かかる河姆渡文化・馬家浜文化の詳細な遺跡報告書によって執筆が可能となった。待望の『河姆渡—新石器時代遺址考古発掘報告』によって、まだ不十分ではあるが河姆渡文化の第一期～第四期の玦飾と玉製装身具の概要が描けるようになった。また、塔山遺跡の報告書の土壌に関する詳細な記載は、玦飾装着者が集団内でどのような立場を成すかについて推察を可能とした。実は、これまでの中国の遺跡のとりわけ「玉器」研究において、それ自身の素晴らしさは記述されるが、遺跡での出土位置や出土状態についてほとんど省略されてきた。あるいは写真は掲載されるが考古学的な図化はなく型式研究にほとんど利用できなかった。このような中で、近年の中国考古学の報告書は資料の学問的な共有化と公開について前向きに取り組んでいるかのようで嬉しい。

言い訳めくが、このような次第で拙稿はまだ中国江南の玦飾を概観的に述べるにとどまっている。もちろん筆者の力量不足で活用しきれなかった資料も多くある。これら不備について大方のご教示とご批正をいただければ幸いである。

末筆となったが、本誌への執筆を勧めていただいた敬和学園大学人文社会科学研究所長の桑原ヒサ子先生に厚く御礼を申しあげたい。

註

- (1) 本稿では、これまで「玦状耳飾」と称してきた装身具を「玦飾」と表記した。理由は、興隆溝遺跡などで「死者の眼窩に置かれた」ものなどがあって、耳飾り以外の用途が示唆されてきたことによる。そして、本遺物が東アジア共通の考古学遺物として検討されるには、同形のを共通用語で表記することで、海外研究者とも意識的な資料の共有化が図れるとの趣旨による。仔細は、拙稿「日本玉文化の系譜と諸問題 大陸渡來說を考える」(『季刊考古学』第89号 雄山閣 2004年)に記した。
- (2) 本稿の時代区分は、小澤正人・谷豊信・西江清高『世界の考古学⑦ 中国の考古学』(同成社 1999年)に拠る。
- (3) かつて拙稿「日本列島の玦状耳飾の始源に関する試論」『東亜玉器』(香港中文大学中国考古芸術研究中心 1998年)で、中国の玦状耳飾分類図を作成し、その大綱の把握に努めたことがある。香港周辺地域の遺跡では鄧聡氏などによって試みが行われているが、大陸の遺跡を対象とした編年の研究の事例に接していない。
- (4) 塔山遺跡調査の報告書(浙江省文物ほか 1997年)では、甲群墓と乙群墓の関係について、甲群墓の陶豆は南から段階的に伝播してきたものであり南から移り住んできた人々の習俗を示す。乙群墓には濃厚に土着文化の特徴を有している。甲・乙群墓は、血縁と文化が異なる集団が残したもので、墓地を共同に用いたのは、親密な共同生活をおくっていたからであるとされている。

参考文献

- 上田 耕・廣田 晶子 2004年「南九州の初源期の玦状耳飾」『環日本海の玉文化の始源と展開』敬和学園大学人文社会科学研究所
- 賀川 光夫 1998年「大分県川原田岩陰の再検討」『おおいた考古』第9・10集 大分県考古学会
- 川崎 保 2004年「玦状耳飾系統・起源論概観」『環日本海の玉文化の始源と展開』敬和学園大学人文

- 社会科学研究所
- 辛 岩・方 殿春 2000年「查海遺址1992～1994年発掘報告」『遼寧考古文集』（遼寧省文物考古研究所編）遼寧民族出版社
- 浙江省文物考古研究所・象山県文物管理委員会 1997年「象山県塔山遺址第一、二期発掘」『浙江省文物考古研究所学刊』長征出版社
- 浙江省文物管理委員会・浙江省博物館 1978年「河姆渡遺址第一期発掘調査」『考古学報』1978年第1期 科学出版社
- 浙江省文物考古研究所 2003年『河姆渡—新石器時代遺址考古発掘報告』上冊・下冊 文物出版社
- 中国社会科学院考古研究所内蒙古工作队 1997年「内蒙古敖漢旗興隆窪聚落遺址1992年発掘簡報」『考古』1997年第1期 考古雜誌社
- 孫 国平 2004年「河姆渡・馬家浜文化における玉玦についての考察」『環日本海の玉文化の始源と展開』敬和学園大学人文社会科学研究所
- 鄧 聡 2000年「東亜玦飾四題」『文物』2000年第2期
- 鄧 聡 2004年「東アジアの玦飾の起源と拡散」『環日本海の玉文化の始源と展開』敬和学園大学人文社会科学研究所
- 藤田 富士夫 1975年「玦状耳飾の素材の在り方について」『信濃』第27巻第9号 信濃史学会
- 藤田 富士夫 1978年「玦状耳飾の起源」『富山史壇』69号 越中史壇会
- 藤田 富士夫 1984年「北陸の玉作りと出雲系文化」『シンポジウム古代の日本海諸地域』小学館
- 藤田 富士夫 2003年「環状型玦状耳飾に関する基礎的考察」『新世紀の考古学』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会
- 藤田 富士夫 2004年「環日本海の玦飾の始源に関する基礎的研究」『環日本海の玉文化の始源と展開』敬和学園大学人文社会科学研究所
- 方 殿春 1991年「阜新查海遺址的発掘与初步分析」『遼海文物学刊』1991年第1期
- ポール・M・チャーチランド（信原幸弘・宮島昭二訳） 1997年『認知哲学—脳科学から心の哲学へ—』産業図書
- 牟 永抗 2003年「關於史前琢玉工藝考古學研究的一些看法」『史前琢玉工藝技術』國立臺灣博物館
- 牟 永抗 2004年「長江の中・下流域における有史以前の玉玦」『環日本海の玉文化の始源と展開』敬和学園大学人文社会科学研究所
- 山内 清男 1964年「日本先史時代概説」『日本原始美術 I』講談社
- 劉 国祥 2002年「興隆溝聚落遺址：8000年前精美玉器 5000年前裸女陶塑」『文物天地』2002年第1期 《文物天地》雜誌社
- 劉 国祥 2004年「興隆窪文化の玉玦および関連問題の研究」『環日本海の玉文化の始源と展開』敬和学園大学人文社会科学研究所